

日本カイロ セミナー

JCA Congress

9

世界と日本のカイロの接点 伝統の日本カイロプラクティック セミナー

JCA Chiropractic Congress has become a tradition

日本カイロプラクティック・セミナーは日本のカイロ業界の先輩によって始められ、30年後の今日なお継続する最も伝統ある行事である。カイロプラクティックがアメリカで誕生し、欧米諸国で著しい進歩を遂げ

ている現状から海外の権威者を定期的に日本に招聘し、最新知識にふれる意義は昔も今も変わらない。セミナーの内容も業界のニーズに合わせて、より専門的かつ具体的な内容に変化している。

回	会期 (Dates)	講 師 (Lecturers)	会場 (Locations)
1	1965. 10. 29~30	J. ジェンシー (Dr.J.Janse)	東京・日本青年館
2	1967. 11. 7~ 8	ベネル・ホイザー (Drs.Pennel & Heuser)	東京・全理連ビル
3	1969. 11. 15~16	ベネル・ホイザー (Drs.Pennel & Heuser)	東京・全理連ビル
4	1970. 11. 14~15	J. ジェンシー (Dr.J.Janse)	東京・全共連ビル
5	1971. 9. 25~26	H. ジレー (Dr.H.Gillet)	東京・全共連ビル
6	1972. 9. 10 9. 24	日本人講師 (Japanese Lecturers) 鈴木裕視、鈴木健之輔、小田高市、米田一平、須藤清次 藤井尚治、松下茂、吉橋績、西堀進午、保坂岳史	名古屋・東山会館 東京・全共連ビル
7	1973. 9. 15~16	日本人講師 (Japanese Lecturers) 塩川満章、藤井尚治、須藤清次、近藤宏次、竹谷内一愿	東京・日本都市センター
8	1974. 9. 15~16	日本人講師 (Japanese Lecturers) 竹谷内一愿、小田高市、松本徳太郎、鈴木裕視、須藤清次	東京・日本都市センター
9	1975. 10. 3~ 4	アルナルド・グローブ (Drs.Arnold & Grove)	東京・日本海運倶楽部
10	1976. 9. 23	日本人講師 (Japanese Lecturers) 藤井尚治、鈴木健之輔、竹谷内宏明	成田ビューホテル
11	1977. 9. 24~25	J. ジェンシー (Dr.J.Janse)	東京・笹川記念館
12	1979. 11. 23~25	A. ステーツ (Dr.A.States)	成田ビューホテル
13	1980. 11. 22~24	アルナルド・グローブ (Drs.Arnold & Grove)	成田ビューホテル
14	1981. 11. 9~11	メジアン (Dr.Mazion)	成田ビューホテル
15	1982. 11. 21・23	ジェンシー・リッチ (Drs.Janse & Richie)	成田ビューホテル
16	1983	R. スエンソン (Dr.R.Swenson)	全国8会場
17	1984. 9. 15~17	J. ジェンシー (Dr.J.Janse) L. アルナルド (Dr.Arnold)	成田ビューホテル
18	1986. 10. 10~12	A. ステーツ (Dr.A.States)	成田ビューホテル
19	1988. 10. 20~23	D. ローレンス (Dr.D.Lawrence) 中川貴雄 (Dr.T.Nakagawa)	箱根・富士箱根ランド
20	1990. 11. 23~25	J. コックス (Dr.J.Cox)	岐阜・名鉄犬山ホテル
21	1992. 11. 1~ 3	D. スコグスバーグ (Dr.D.Skogsburgh) C. クリーブランド (Dr.C.Cleveland III)	大阪・科学技術センター
22	1994. 9. 23~25	R. エイムス (Dr.R.Ames) A. クレイハンス (Dr.Kleynhans)	宮城・仙台国際センター

世界トップ教育者により日本のカイロ学技が向上

Top Guests Were Invited for the JCA Chiropractic Congress



Rolla J. Pennel, D.C.
ローラ・ペネル講師



Gordon Heuser, D.C.
ゴードン・ホイザー講師



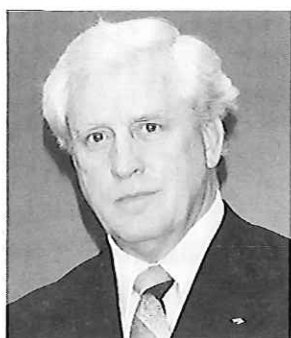
Joseph J. Janse, D.C.
ジョセフ・ジェンシー講師



Henry Gillet, D.C.
ヘンリー・ジレー講師



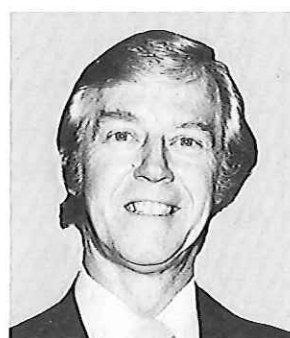
Lee E. Arnold, D.C.
リー・アルナルド講師



A.E. Grove, D.C.
A・グローブ講師



Alfred Z. States, D.C.
A. ステーツ講師



John M. Mazion, D.C.
ジョン・メジアン講師



Leonard Richie, D.C.
レオナルド・リッチ講師



Rand S. Swenson, D.C.
ランド・スエンソン講師



Dana J. Lawrence, D.C.
デナ・ローレンス講師



Takao Nakagawa, D.C.
中川貴雄講師



James M. Cox, D.C.
ジェームス・コックス講師



Dennis R. Skogsbergh, D.C.
D. スコグスバーグ講師



Carl S. Cleveland III, D.C.
カール・クリーブランド講師



Richard Ames, D.C.
リチャード・エイムス講師

第1回日本カイロプラクティックセミナー

1st JCA Chiropractic Congress Tokyo 1965

30年前
歴史の始まり



▲Dr. ジェンシーを日光に案内
左は草薙大山会長、右は竹谷内実行委員長

◀来賓による開会挨拶

日本のカイロプラクティック業界は常にアメリカの高度な教育、充実した業態を理想としてきた。1965年10月29～31日の3日間、ナショナル・カイロプラクティック大学、ジョセフ・ジェンシー学長を招く機会を得、日本カイロプラクティック総連盟は会を挙げての歓迎を行なっ

た。セミナーの初日は前厚生大臣、神山博先生、衆議院議員医博、河野正先生、前参議院議員、阿久根登先生、アサヒイブニング・ニュース、芝均平社長など多数の来賓のご臨席を頂いた。来賓祝辞、日米両国旗掲揚ならびに両国歌斉唱と厳粛なうちに華々しく開講した。

アメリカ最高と称されるカイロ大学の学長、一流のカイロプラクター、ジェンシー学長の身ごなしと口をついてほとばしったものは、卓効を可能にするカイロプラクティックの原理応用と、その限界を示唆したもので、患者と自らの立場をわきまえる高邁なスピーチだった。

第2回日本カイロプラクティックセミナー

2nd JCA Chiropractic Congress Tokyo 1967

ペインコントロール
セミナー

1967年11月7、8日の2日間、保坂岳史氏の橋渡しで国際ペインコントロール講座が全理連ビルで開催された。

講師は国際ペインコントロール学会のローラ・J・ペネルとゴードン・D・ホイザーの両DC。2年前、第1回ジェンシー学長を招聘し大成功を収めた余韻のある中で迎えた2回目の国際講座。全国から230名が集まった。

懇親会は講師ご夫妻、総連役員たちと

日本料理屋で歓談。酒を飲み交わすほどに国境を忘れた楽しい日米交換が行なわれた。

当時はナショナル大学東京講座とか国際ペインコントロール講座と呼ばれ、日本カイロプラクティック・セミナーに統一して呼ばれるようになったのは、後年ことである。この当時、総連の国際セミナーがその後30年継続すると想像した人はいなかった。



▲R. ペネル講師を
歓待する総連役員



◀2年連続しての国際
ペインコントロール
講座。講師と役員
の記念撮影

第3回日本カイロプラクティックセミナー

3rd JCA Chiropractic Congress Tokyo 1969

再びペイン
コントロール
セミナー

一昨年に引き続き、11月15、16日の両日東京代々木の全理連ビルに150名の参加者を集め、第2回国際ペインコントロール日本講座が開かれた。ペインコントロールに学問的なスポットを与えることを期待した人には物足りない気がしたが、日本の業者も実際行なっている技術を上手にまとめているのはさすがであった。日本人は技術的にはかなり熟達している人が多いが、系統的に解説するとなると、海外の講師に適わない。勉強不足

なのか、表現力に欠けてるのか。ここで反省しないと、本人の持つよい所がいつの間にか海を渡り、舶来品となって逆輸入される恐れ無しといえない。さらに欲を言えば、日本カイロ総連盟の名で主催する以上どこまでも、カイロプラクティックが基本テーマであって欲しいとの声があった。臨床でペインコントロールの意義が大きいのは認めても、カイロとの関係を常に忘れてはならないと思うのである。



◀ペネル・ホイザー両講師は13名の夫人、同行者を伴って入場。夜の懇親パーティーもひとときわ賑った。

第4回日本カイロプラクティックセミナー

4th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1970

ジェンシー学長
2度目の来日



1970年11月14、15日、カイロプラクティックの世界的権威であるジョセフ・ジェンシー学長（ナショナルカイロ大学）をお招きし、全共連ビルで盛大なセミナーを開催した。日本青年館で開かれて以来、5年ぶりの来日で、その時の感激を再び味わおうと、北は北海道、南は九州まで約3百名の参加者が会場をうめつくした。

来賓には東京教育大学名誉教授、杉靖三郎先生を初め多数の医師、厚生省の役員、関係団体代表が出席した。通訳は日大の原田教授。ジェンシー学長は教育者、研究者、哲学者、世界旅行家、熱心なクリスチャンでその高潔な人格は5年前の講演で参加者に深い感銘を与えた。今回も前回に引き続きカイロプラクティック学技の真髄に迫る名講演で、2日間参加者の興味と関心を離さなかった。今回のジェンシー学長による講演は多数の新聞で報道された。本年はカイロ誕生して4分の3世紀（75周

年）を迎え、その祝宴も行なわれた。ジェンシー学長は、日本でのカイロプラクティック制度化にも強い関心を示し、日本カイロプラクティック総連盟および全国療術師協会幹部の案内で厚生省を表敬訪問。内田厚生大臣、熊崎事務次官と歓談し、アメリカのカイロプラクティックを説明し、日本での理解をお願いした。

▲2回目のドクター・ジェンシー来日講演。分かり易く、学問的で、人を魅了してやまない講演に全国から集まった受講生は感激した

開講式

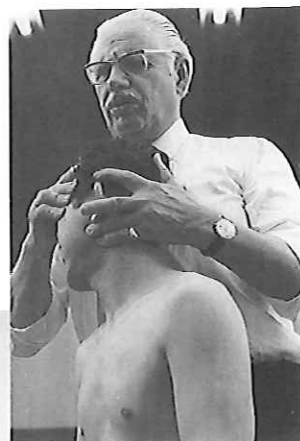
- 一 開講の辞
- 二 日米国歌演奏
- 三 会長あいさつ
竹谷内一恵
- 四 実行委員長あいさつ
中島美津
- 五 来賓祝辞
- 六 講師紹介
竹谷内一恵
- 七 講師あいさつ
ジョセフ・ジェンシー
- 八 五分休憩
- 九 開講

第5回日本カイロプラクティックセミナー

5th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1971

1971年9月25、26日の両日、二百数十名の参加者を集めて第5回セミナーが開かれた。ベルギーから招聘したH. ジレー講師はヨーロッパカイロの重鎮で、有名なモーションパ

ルベーションの開発と研究で知られた人。人類は進化の過程で長い筋肉は順応したが、脊椎側に付着する短い筋肉は順応出来ず、サブラクセーションの原因を作っている、と語る。



▲ジレー講師のオリジナルなモーションパルベーションを目の当たりで見て感動

▲ジレー講師を囲んでの記念撮影。大いなる充実感



第6回日本カイロプラクティックセミナー

6th JCA Chiropractic Congress Nagoya & Tokyo 1972

日本人講師
によるセミナー



▲吉橋績先生の挨拶



▲竹谷内一恵会長の挨拶

第6回セミナーは名古屋（東山会館）と東京（全理連ビル）の2カ所で開かれた。名古屋は9月10日。初めての企画ということもあり二百名の受講者であふれた。講師は米田病院の米田一平先生、鈴木整形外科の鈴木裕視先生、臨床部門ではベテランの小田高市、鈴木健之輔両先生による実技指導。今春帰国したばかりの須藤清次DCは「ムチ打ち症の治療」を講義。

東京は9月24日に開催。百七十名の受講者を集め、銀座内科の藤井尚治先生、北海道治療師会理事長の吉橋績先生、保坂岳史先生の講義。午後は西堀進午、松下茂両先生による実技指導が行なわれた。5時に閉会され6時より、カイロデーを祝う懇親会が開かれた。



▲須藤清次講師の講演



▲鈴木健之輔講師の実演



▲西堀進午講師のデモンストレーション

第7回日本カイロプラクティックセミナー

7th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1973

DCと医師
によるセミナー

1973年9月15、16日、日本都市センターで2名の医師と3名のDCによるセミナーが開かれた。医師のラジオドクター・近藤宏二氏は「臨床医学の矛盾とカイロ」、ストレス専門医の藤井尚治氏は「ストレスから見たカイロ」。DCは塩川満章氏が「胸椎の理論と実技」、須藤清次氏が「腰椎の理論と実技」、竹谷内一恵氏が「頸椎の理論と実技」を講義。

会場には、アメリカのカイロ大学卒業のDCから本場の知識を吸収しようとするただならぬ熱気が漂っていた。会場の雰囲気盛り上げるように、自民党の2名のヤングパワー・中尾栄一農林政務次官と山口敏夫厚生政務次官が多忙な政務の中を駆けつけカイロの有用性を認め、今後一層の業者の団結と向上の必要性を説き、参加者を激励した。



▲近藤宏二ラジオドクターの講義



▲左から、竹谷内前会長、近藤宏二講師、甲木永理理事長



▲塩川満章講師の講義



▲竹谷内一恵講師の実技

第8回日本カイロプラクティックセミナー

8th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1974

日本人の
ベテラン講師



昨年に引き続き9月15、16日の2日間、都市センターで開かれた。竹谷内会長は最近の未熟者によるカイロ事故を憂慮し、基本教育がますます必要になることを説明。講義では「脊椎検査法と後頭骨の矯正実習」を行ない、須藤清次、松本徳太郎DCの協力で実技指導があった。次ぎに小田高市氏の「カイロ実技と低周波併用治療」に受講生は感嘆した。

2日目は整形外科医・鈴木裕視氏による「脊柱および支持組織の解剖学と生理学」。オーバーヘッドプロジェクターやスライドを使い分かり易く講義した。セミナーの最後は須藤清次DCによる「骨盤のサブレーションとその矯正法」。テキストとモデルを使い

講師は懇切丁寧な講義を行なった。適切な講師の人選とスムーズな運営。日本カイロ総連盟会員を対象にしたセミナーは大成功だった。



▲鈴木裕視講師の講義



▲小田高市講師の講演



▲左から、須藤、塩川、小田、松本先生ら来賓

第9回日本カイロプラクティックセミナー

9th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1975

講師の見事な
チームワーク



▲アルナルド講師の講演



▲グローブ講師のテクニック

10月3、4日の両日、東京の海運倶楽部で4年ぶりの国際セミナーが盛大に開かれた。来賓には整形外科医の塩川満蔵、鈴木裕視、坂井友吉、古沢清吉先生。科学新聞の池田社長、留学帰朝者の須藤、

塩川、一ノ瀬ドクターも参加。

講師はDr. アルナルドと Dr. グローブの2名。Dr. アルナルドは受講生のモデルを壇上に招き、脳脊髄の反射テスト、内臓テストなど60~70のテストを15分で



カバーし、次に立った Dr. グローブはその診断にそって脊椎の矯正を数分で行ない、2人の見事なチームワークふりと流れるような、診断治療に受講生は度胆を抜かれた。「治療は患者の診断に応じ、具体的かつ正確でなければならない」という言葉は十分うなづけた。講義はスライドやデモンストレーションをふんだんに入れジョークを交えて講師の人間味豊かな側面にもふれ受講生の好感を持った。

第10回日本カイロプラクティックセミナー

10th JCA Chiropractic Congress Narita 1976

JCA創立
15周年を祝う

今回はJCA創立15周年目。そのお祝いも兼ね、都心を離れて自然の残る成田国際ホテルで少し趣向を変えたセミナーを企画してみた。9月22日夕方大型チャーターバスで東京駅を出発、成田ビューホテルに集合。夜は15周年祝賀会で盛り上げ、翌23日は一日セミナー。また家族同伴も歓迎し観光バスをチャーターして

名所旧跡をめぐる特別企画を用意した。

セミナーの講師は藤井尚治MDの「ストレスとカイロ」、竹谷内宏明MD、DCの「脊柱の動的解剖学」、ベテラン鈴木健之輔講師の「姿勢の形態とその治療」、富田幸八郎MDの「脊椎椎間内狭窄症」と多彩なテーマが特長。

ビューホテル社長の箭内源典社長は長

年のカイロ支持者。「私もカイロ治療の真価を十分理解する者として、今回の企画には全従業員をあげてご協力させて頂きたい」と熱を入れた。

セミナーでは熱心な受講生たちが、それぞれの講師の話しとデモンストレーションに耳と目を集中していた。新企画は成功だった。



▲この後JCAセミナーで何回も使われるようになった成田ビューホテル



▲藤井尚治講師の講演



▲鈴木健之輔講師の講演



▲竹谷内宏明講師の講演

第11回日本カイロプラクティックセミナー

11th JCA Chiropractic Congress Tokyo 1977

日本に是非
カイロの大学を

第11回 日本カイロプラクティックセミナー 第7回 国際講座



私が再び美しい皆さまの国を訪問でき、皆さまの暖かい友情、連帯感、職業に対する真剣さに接し、心暖まる思いを感じます。私は今朝、講義の重要性をどうしたら伝えられるか考えておりました。「重要性」というのは、この私たちのカイロプラクティックが人類に果たす「重要性」であります。私はカイロの教育に携わって40年になり、カイロの発展史を自ら体験してきました。私はアメリカ人として、日本の皆さまにどうあるべきだ、という資格はありません。それは皆さまが決めることだと思うのです。ただ、この素晴らしい一億の民を持つ皆さまの国に、充実した立派なカイロプラクティックの大学が一つくらいはあるべきだ、と信ずるものであります。



▲セミナーの来賓と実行委員たち Dr. Janse was a main speaker

第12回日本 カイロプラクティックセミナー

12th Chiropractic Congress Narita 1979

1979年11月23日より3日間、Dr. ステーツによるセミナーが成田ビューホテルで開かれた。今回はナショナルの卒後教育という格式ある形で初めて行なわれた。講師は親しみある口調で中身の濃い講義を分かり易く伝える。今回のセミナーは数々の新企画が沢山盛り込まれスライドでの会員治療所紹介、通信講座受講生の集い、講師を囲んでのパーティなど会員が一致団結した最高のセミナーだった。(和田孝一)

人間それぞれ異なる姿、形、性格があるようにカイロの技術も様々です。それは使う人の工夫、アレンジで様々な技術が生まれるからです。しかし基本が大切なことを講師が教えてくれました。(松柴哲)



▲オーソドックスで基本重視なステーツ講師の講演に人気



ビューホテルの広い会場で盛り上がった懇親パーティ



▲ステーツ講師の実演 Dr. A. States

第13回日本カイロプラクティックセミナー

13th JCA Chiropractic Congress Narita 1980

名コンビによる
診断・治療

前年のステーツ・セミナーに続きナショナルカイロ大学卒業後教育としてのJCAセミナーが11月22～24日、成田ビューホテルで開かれた。講師は5年前のアル

ナルド、グローブDCの名コンビ。会員はカイロの経営法、検査法、テクニックを20時間みっちり学んだ。パーティや日本人ベテラン先輩の実技披露もあった。



▲Dr. グローブの実演 Dr. Grove



▲Dr. アルナルドの診断 Dr. Arnold

第14回日本カイロプラクティックセミナー

14th JCA Chiropractic Congress Narita 1981

大切な心のつながり

患者さんは沢山の悩み、苦しみ、問題をもっています。それを十分に聞くこと、先生と患者の密接な人間関係を築くことが最高の治療なのです。患者さんは紹介で来院するケースが圧倒的です。興味深いことに、よく紹介する患者さんは必ずしも良くなったとは限りません。しかし、その人は先生に良い印象を持っているの

は確かです。それは、その先生がその人に他の誰もが与えられなかった「何か」を与えることが出来たからです。それは検査かも知れない。アジャストかも知れない、安心感かも知れない。その先生がその患者さんにとって特別だと思われたことです。先生がベストを尽くしたとき「心」のつながりが生れるのです。



▲Dr. メジアン の迫力ある講義 Dr. Mazion



▲パーティで日本の雰囲気にとっぷり浸ったDr. メジアン



第15回日本カイロプラクティックセミナー

15th JCA Chiropractic Congress Narita 1982

時間を忘れた
素晴らしい講義

「カイロプラクティックを真に日本に確立するのは、国会議員でも、お医者さんでもない、ここで受講している皆さま方です」「私はカイロプラクターが仲間からお金を取って講習を商売にする人が多いことに困惑しています。講習屋さんは『こうすればすぐ使えて、すぐ治る』と言葉巧みに業界の混乱と分裂に一役買っ

ているのです」「一つの原因とそれに対する一つの治療技術は非現実的です。人間の病気は個性、体質、環境、民族、感情が複雑にからみあって起ります」。

「私たちは『治す』という言葉に注意する必要があります。緩和する、回復する、改善する、抑える、和らげる等の言葉を多用すべきでしょう。治すのは結局、生

体本来のもつ自然治癒力だからです」「5つの提言の1つは、未来は、その準備をしている人の手に与えられる。2つは狂信をやめ他者との健全な信頼関係を築く、3つは、時間と仕事を大切にする、4つは、他者の批判をやめ、褒めたり認める、5つは、自信をもつこと。最後に成熟した真の職業人になろう」としめくくった。



▲カイロの真髄に迫る講義



▲Dr. ジェンシーの講義に受講生は引き込まれる



▲Dr. リッチのX線診断の講義

第16回日本 カイロプラクティックセミナー

16th Chiropractic Congress 8 Locations 1983

各支部が
熱烈歓迎

1983年にスエンソン博士が研究のため来日、JCAはご家族を暖かく迎えた。各支部ではスエンソン博士を招いてカイロ・セミナーを開催、良き思い出を残した。



▲スエンソンセミナー東京



▲スエンソンセミナー栃木



▲スエンソンセミナー大阪



▲スエンソンセミナー青森



▲Dr. スエンソン来日歓迎



Dr. Rand Swenson▶

第17回日本 カイロプラクティックセミナー

17th JCA Chiropractic Congress Narita 1984

参加者も役員も心底燃えた3日間だった。カイロのアイデンティティづくりに邁進するJCAの意気込みが会場のすみずみまであふれていた。「カイロのアイデンティティはテクニックでなく、コンセプトです。人間は二足動物であり、ゆえに脊柱、それに付随する筋肉や関節の生

体力学と神経系の間には密接な関係がある。これがアイデンティティなのです」。ジェンシー先生は「ためらったり、考え込んだりしているとチャンスを失う。人は弱さから逃げられない。戦うか減じるか。それなら、いまの立場で立ち向かう。積極的に幸せな人間になろう」。

ジェンシー先生
最後の来日



▲Am I going to eat this?



第18回日本 カイロプラクティックセミナー

18th JCA Chiropractic Congress Narita 1986

会場は受講生のひたむきな気魄と熱気が充満し、それに応えるようにステーツ講師の指導も徐々に熱を帯びてきて、最後には先生の芸術的ともいえるテクニックの独断場になってしまいました。正確なコンタクト、LOD、スピード、患者とドクターの正しい姿勢、これらがマッチして初めて最大の効果が発揮されるも

のだということが分かりました。簡単なテクニックの奥に隠された数々の秘密。その素晴らしさの一端を見せつけられ、思わずうなっていました。先生が執拗とも思えるほど様々な検査をしてあらゆる角度から正確な診断を求める姿は、カイロの本質が優れた診断にあることを示されていました。(関昌由実行委員)



カイロプラクターの
あるべき姿を示す

Dr. and Mrs.
A. States



第19回日本カイロプラクティックセミナー

19th JCA Chiropractic Congress Fuji Hakone Land 1988

分からないときは
基本にもどる

1988年10月20日より3日間、全国から230名の会員が集まり富士箱根大会が開かれた。ローレンス講師と中川講師の若手バリバリの講師が、受講生を2組に分け講義を行なった。竹谷内会長は「カイロを取りまく環境は変わりつつある。国民の健康に関する価値観、経済的なもの、医療問題、厚生省の対応、WFCの創設など、カイロの将来は非常に明るいと思います」。中川先生は、「基本にいつも戻ることが大切だと思います」。ローレンス先生は「私の心はいつまでも日本に残るでしょう」。セミナー恒例のパーティ「JCA祭り」は各支部対抗の演技でJCA会員のパワーを見せつけた。



▲Dr. D. Lawrence at lecture



▲Dr. Nakagawa at demonstration 中川貴雄先生の実技



▲JCA party at its highlight 盛り上がったパーティ



第20回日本カイロプラクティックセミナー

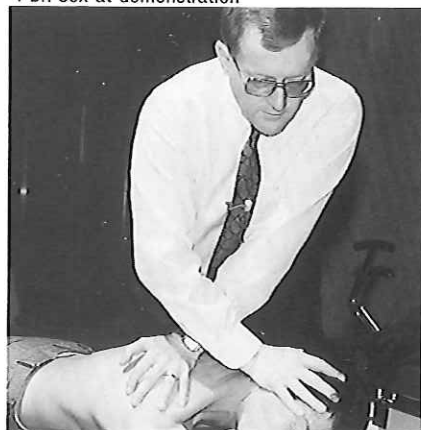
20th JCA Chiropractic Congress Gifu 1990

腰痛への
アプローチ

11月23日から3日間、愛知県犬山市の名鉄犬山ホテルに全国から270名の会員を集めて20回目の記念大会を開催した。講師はアメリカでも人気のあるコックス・テクニックの創始者、Dr. コックス。コックステーブルの製作会社であるウィルアムス社のコギン社長も参加し4台のコックステーブルを提供。テーマは「最も一般的に見られる腰痛要因の診断と分類、治療法」という、コックス講師得意の分野で、豊富なスライドを使って関節の解剖生理や腰痛のメカニズムの説明で3日間のセミナーは知的興奮のうちにまたたくまに過ぎた。恒例のセミナーの宴会では各支部対抗のゲーム。全国の仲間意識が盛り上がったパーティだった。



▼Dr. Cox at demonstration



第21回日本カイロプラクティックセミナー

21st JCA Chiropractic Congress Osaka 1992

快晴のもと11月1日から3日間、大阪科学技術センターで盛大にセミナーが開かれた。講師はクリーブランド大学のクリーブランドIII世学長とナショナル・カイロ大学のスコグスバークDCの2名。教育の専門家だけに豊かな知識と情報量で受講生を魅了。あらゆる質問にも的確に答えてくれた。パーティは豪華なロイヤルホテルで日本の伝統芸能「文楽」が披露された。



Dr.C. Cleveland III



Dr.D. Skogsborg



第22回日本カイロプラクティックセミナー

22nd JCA Chiropractic Congress Sendai 1994

9月23日より3日間、宮城県の仙台国際センターで恒例の日本カイロプラクティック・セミナーが開かれ、全国から170名の来賓、参加者が集まった。

今回のメインテーマは「スポーツ障害に対するカイロプラクティック的アプローチ—軟部組織を中心として」、講師はロイヤルメルボルン工科大学のドクターR. エイムス。今回スポー

ツを取り上げたのは世界のカイロがオリンピックなどスポーツの世界に積極的に参入し、その真価を発揮しようとしている折、タイムリーな企画で参加者の好評を得た。その他、「マニピュレーションの合併症を防ぐ」のタイトルでクレイハンス教授、「TMJと運動機能」のテーマで東山一博歯科医と、いずれも臨床家の興味を引く内容であった。



Dr. R. Ames



RMIT大学日本校誕生の記録

The RMIT Japan story: People who proved that the impossible could become possible

これはいかにして日本に最初の国際基準のカイロブラクティック大学ができたか、その物語である。それは「正しい強い思いは必ず成就する」という証明でもあった。多くの人たちが長い年月をかけて思いを強め、幾多の困難を乗り越えて達成する成功物語である。それはあたかも小さな一滴のしずくが大河に成長するドラマを見るようである。

思いが宿る

「私は日本のみなさまに、こうあるべきだと述べる資格はありません。ただこの美しい素晴らしいみなさまの国に、カイロブラクティックの正規な大学があってもよいと思うのです」

1970年代から80年代にかけてJCAの招きで5回来日したナショナル・カイロ大学のジェンシー学長は何度も言葉を変えて同じことを言った。その言葉は当時の人たちの心に深く刻まれた。ジェンシー先生は言行一致の人であった。当時JCAが検討していた系統教育（通信講座）のテキストにナショナル大学の教材翻訳権を無償で提供し、JCAのカイロ・テキスト作成に役立った。ジェンシー学長の好意を少しでも会員レベルアップに生かそうと、JCAは受け皿作りに取り組んだ。それから10年後、意外な展開が始まる。

舞台がアメリカから世界に

1987年、ロンドンで世界36カ国からのカイロ界リーダーを集めて初のプレジデント・サミット会議が開かれた。カイロの世界的なアイデンティティを守り、構築し、標準化や法制化を進めていこうという話し合いだった。日本人で唯一参加した竹谷内一恵氏は当時を回想する。

「国際的規模でしかもカイロの創始国アメリカが中心でない会議に驚き、なおかつ時代の変化を強く感じました」。

カイロがアメリカ中心なら、いままでのように良い生徒になり面倒をみてもらえば良い。しかしカイロが国際的になれば個々に自立と責任が求められる。日本だけが例外になるわけにはいかない。世界各国が努力しているように、教育、研究、法制化などに確かな実績を要求される。アメリカの影に隠れて学ぶことに専念できる時代が去ったことを実感した。

このサミット会議ではカイロの国際組織設立が話し合われ、翌1988年のシドニーでWFC

（世界カイロブラクティック連合）が結成された。

具体化への一歩

当時JCA会長であった竹谷内氏は帰国後翌1988年に、シドニーのWFC結成大会に出席したあと、JCAにカイロ・カレッジ構想委員会を新設。それは当時JCAで行なっていた会員対象の通信講座形式の教育とは全く異なるコンセプトの欧米並のスタンダードをもつ「大学構想」であった。

「当時JCAは何度もアメリカ視察研修団を派遣し、会員はアメリカのカイロ大学にアコがれていました。でも自分たちの手でカイロ大学を作るのはピンときませんでしたね。JCA全会員の意識改革が必要でした」と語る。

1989年竹谷内氏は会長を退き、カレッジ設立委員長に就任。同年夏には、CCE基準に合致する大学設立の可能性や米国カイロ大学の協力体制を調査するため渡米する。また委員とともに国内キャンパス用地の調査、予算、資金調達方法などを検討した。同時に教科書として使う海外の最新テキストの翻訳発行も計画的に行なうことを決めた。

学校法人も調査した。監督官庁で調べた結果、学校法人で学校を作るには、まず自前の土地、建物が必要で、東京だと小規模なものでも5～10億円を要すること。また許可には設計の段階で行政指導を必要とすること、テナントではダメということが分かった。本格的な大学となると、何百億円の資金と厳しい文部省の指導があり、とても素人が乗り出せる計画でないことも分った。ならば既存の大学にカイロブラクティック学部を、とも考えたが現実には甘くなかった。大学の学部新設にも文部省は厳しい条件をつけ、既存の有名総合大学でも学部一つ新設するのに大変な苦労があるのを知った。まさに八方ふさがり。改めて、日本の教育のもつ厳しい規制を感じる思いだった。

しかし挫折するわけにはいかなかった。困難は予想されたことだ。まず会員の支持を受ける必要がある。

「会報を使って、会員の声を聞いたり大学設立基金を作ったり、ムード作りに努めました」と周到な準備だったことを明かす。「JCAは1968年から東京で月例研修会を10年間続け、次に78年から全国10カ所で統一テキストを使

った系統教育（通信講座、カイロ学院）を10余年（95年閉校まで17年間続いた）続け、残りは常設校しかなかった」「でも、このステップは難しかった。全く未知の経験でリスクを恐れたからです」。

この未経験がのちに共通のビジョンをもちながら、収拾のつかない対立を生むことになる。

リーダーの交代

1989年、会長に就任した村松伸朗会長は大学計画推進を宣言。JCA創立30周年を迎えた1991年には「欧米並の教育レベル、研究施設や図書室、インターン養成施設を備える本格的な大学設立に向け、JCAは業界リーダーとして責任を果たす」と力強く訴えた。村松会長らは1991年に米CCEの招きで渡米。そのダラス会議で示したJCAの青写真は、日本のカイロ学校の中でもひととき注目を浴びた。その年に発行されたJCA30周年記念誌「リ・ボーン」は国内外に広まったカイロの信頼とJCAのカイロ大学計画を大々的にPRする内容だった。役員と会員は新たなチャレンジに燃えた。

カイロ大学設立は、長年JCAが目標に挙げてきたカイロの社会化、科学化、国際化の当然の帰結だった。折しも1990年頃は、増加する短期養成のカイロ学校や、カイロ治療の傷害例に厚生省が注目し始め、マスコミもカイロの問題点を取り上げる時代であった。91年には整形外科医による三浦レポートが厚生省に提出され、それに基づく全国達達も行なわれた。あはき団体は「我々が高卒3年の専門教育を受けているのにカイロは無教育、無資格」とカイロ反対運動に弾みをつける。それに対し日本のカイロ業界の反応は鈍かった。JCAは、危機感を強めた。その結果、この閉塞感打開には「正規な国際基準の教育」しかない、と大学計画実現の必要性を再認識した。

なににも増して「日本人自身の手で欧米並のカイロ大学」を作る夢は、常に業界での先頭を走ってきたJCA会員のロマンとプライドを刺激した。通信教育、認定、セミナーで満足してはならない。自分だけの生活ならそれとも良いだろうが、後輩に誇れる業界作りにチャレンジするところに男のロマンがある。JCAの役員と会員は燃えた。

対立と出直し

JCAは困難な闘いの先陣を切った。ところが「言うは易く行なうは難し」である。90年前後はちょうどバブル絶頂期で会員の懐も豊かだった。だがキャンパス候補地も非常に高騰していた。さらに任意団体のJCAは大きなお金を動かせる組織でないことに気付いた。不動産は買えないのである。JCAでは「大学計画」を考えられても「実現できる」組織ではないことが分った。そこで大学の受け皿母体となる法人を何にするかで議論が沸騰した。

そこで休眠中の繊維関係の社団法人を買収して、それを母体に大学を立ち上げようとするグループと、それを危険視するグループとに役員会が真っ二つに分かれ、その是非を会長選挙で争う最悪事態に発展してしまった。大学設立という目的で一致しながら、その受け皿の手段という点で対立。双方の思いが強いだけに衝突は激しかった。結果は社団反対派が押す竹谷内宏明候補（現会長）が僅差で勝ち、社団推進派は全員自主退会の道を選ぶ。JCA30年の歴史上の一大痛恨事だった。

「あの会長選挙は、役員と会員が真剣にカイロ教育を考える機会になったのは事実です」と竹谷内宏明会長は熾烈だった8年前の会長選挙を振り返る。

当時の理事で、現在は竹谷内会長のもとで理事長を務める村上佳弘氏はいう。

「カイロ大学設立への理想と現実とのギャップをどう埋めるか…会長選挙は政策の対立でなく、組織運営の違いでした。結局会員はパブリス的発想でなく正道を望んだわけです」

選挙に勝ったとはいえ、新会長には大学計画の具体化、という重責がかけられていた。

「いままであらゆる手を尽くしたわけで、名案は全くありませんでした。ただ税務対策上、事業部門を独立して、有限会社を作り、将来への足固めを行ないました…」竹谷内会長は決して自信があったわけではない、と語る。ただ一つ教育委員会の復活と、大学の議論をいままでのように理事会でなく、教育委員会に移そうとの秘策があった。

竹谷内会長は1977年以来15年間、JCAの教育委員長に座っていたが、前会長の方針でしばらく教育委員会が開かれなかった。そこで92年にベテランの吉橋昌厚氏を教育委員長に指名。教育委員会は7名のDCで再開された。

ピンチヒッターだったクレイハンス教授

1993年は吉橋氏の地元札幌で、臨床カイロ学会が予定されていた。そのとき以前から交渉していた講師が来日不可能になり急に代役が必要になった。相談を受けた吉橋氏の脳裏に真っ先に浮かんだのが、ドクター・クレイハンスだった。彼はナショナル大学時代の恩

師であり、当時カイロ学部主任の地位にありながらジェンシー学長の命を受けオーストラリアのカイロ教育建て直しに旅立った人だ。

「私が日本で開業し、生活が安定したら日本で会いましょう」

これがクレイハンス先生との別れの約束で、と吉橋氏は回顧する。

それから17年、そのドクター・クレイハンスはオーストラリアのカイロ教育を私塾からなんと総合大学の学部までに発展させ、RMIT大学教授にまで上り詰めていた。

クレイハンス教授は吉橋氏との約束を果たすため、スケジュールを変更して日本に向かった。千歳空港では感激の再会だった。吉橋氏は続ける。

「積もる話しはつきませんでした。ちょうど私も教育委員長に就任したばかりで、自然にJCAの教育に話題が移り、カイロ学院、生涯教育、常設校の計画など説明しました」

クレイハンス教授は、オーストラリアでの自らの経験を重ねてか、それに似た日本の実情に非常な関心をもって聞き入った。

「札幌の学会前後、観光は全くせずに我が家でご飯と味噌汁を食べながら、クレイハンス教授は紙にペンで書きながら私に語りかけました。それはにわかに信じられない内容でした」

と吉橋氏は当時をふり返る。

クレイハンス教授の提案

クレイハンス教授はオーストラリアでの経験を思いだしながら、日本でのカイロ教育に次のような具体的提案を行なった。JCAが通信教育から常設校への脱皮をめざしているなら、RMITが協力して3年制のプログラムを作ろうじゃないか。6年制カリキュラムの半分の1800時間か2000時間のステージ1でいい。カリキュラムやディプロマ（証明書）はRMITが出そう。その代わりJCAが受け皿になり教育スタッフを日本で集めてもらう。正規な大学教育としてやろう。私たちは日本側が独立してできる状態になればいつでも手を引く。JCA会員の再教育コンバージョン・プログラムも考えて、教育のレベルアップも図れる。

吉橋氏は彼の話をもとにどこまで信じていいか分からなかった。あまりに壮大な話なのだ。

「そういえば、僕の大学研究生時代の友人が東邦大学に何人もいて、教授、助教授クラスになっている。彼らの応援を得られるかも知れない」

そのように話を合わせたものの、自分たちが教えた学生にRMIT大学が卒業証書を与える、そんなことが現実になりうるのだろうか。半信半疑の思いは晴れなかった。

1961年の創立以来任意団体であったJCAは、税務処理上1993年に営利部門を独立して有限会社（JCA企画）を設立していた。会社法人として初めて貸借した現SDビル4階にJCAセンター（33.5坪）を開設し、このスペースを使い将来念願の常設校「JCAカイロプラクティック学院」を計画していたのである。2年制4学期、1160時間という具体的な内容も固まっていた。

それにしてもクレイハンス教授の話はあまりに唐突だった。

村上佳弘理事長は回想する。

「RMITの看板を背負うプロジェクトに夢と不安が交錯して身震いしました。カイロ業界で正道を歩んできたJCAの責任において、失敗は許されない事業だからです」。

日豪両サイドで実現の模索

JCAの理事会は、とにかくこの構想の可能性を調査するため、94年2月、吉橋教育委員長と竹谷内伸佳（当時カイロ学院）運営委員長の2名をオーストラリアに派遣することになった。

その結果、①RMIT大学が想像以上の規模と内容をもつ総合大学である、②日豪のジョイントベンチャーがうまく行けば日本のカイロ教育を革新できるかも知れない、③RMITはカイロ教育に実績があり、日本的にアレンジすれば即導入可能であることなどが分かった。

当時調査に加わった竹谷内伸佳氏は、「自分たちは2年制を考えていたので、最初は慎重でした。でも現地調査をして、これはすごいチャンスかも知れない、と考え直しました」

最初は3年制で、ディプロマがもらえ、大学卒の扱いだという。大学は4年制という固定観念がある我々には理解できないところもあった。

クレイハンス教授もRMITカイロプラクティック・プログラムを日本でやるにあたり、正式な海外プログラムとしてRMIT大学理事会の許可を得る必要があった。海外のプログラムで卒業証書を授与するには、大学の中で多くの承認手続きを要した。特にオーストラリアの大学が日本で学位を出すプログラムは前例がなかっただけ苦勞もあった。

クレイハンス教授は大学当局に提出する資料を作るため、日本の教育事情と関連法律、JCAの信頼性、企画の可能性について第3者に調査を依頼した。調査は市場調査から弁護士との相談、日本の文部省や豪大使館教育部との接触までを含み、その結果はマル秘資料としてRMIT大学理事会に送られた。RMIT大学理事会はそれを審査し、その手応えからクレイハンス教授もこの実現性に確信をもつこ

とができた。教授にとっても海外でのRMIT・カイロプラクティック・プログラムは初体験で彼の力量が試されていた。今考えると教授は大学側の理解を得るまで、大学とJCAの間に立って神経の休まる時がなかったに違いない。94年5月にメキシコ・カンクンのWFC役員会に出席した竹谷内一恵氏は、初めてこの計画の一部に漏らした。このことが後にCCJからの不信感を買う原因になった。彼らの言い分は、日本で国際基準のカイロ大学を開校するなら自分たちに事前の説明があって当然、ということだった。しかし設立はまだ正直自分たちにも分からなかったのだ。

1994年6月のJCA理事会はRMIT大学が提供するものと、JCAが守るべき条件などの契約草案準備で多忙を究めた。実際に実行するなら、職員と学校施設の確保、学生募集、講師探し、教材の翻訳と次々に着手しなければならないのだ。

「そんなに急に出来るのだろうか、1年遅らせたら」という不安の中で、最終結論を出さねばならない理事会が9月に仙台で開かれた。95年春の開校なら半年前のこの9月は決定期限ぎりぎりであった。

苦渋の決断

役員として複雑な心境だった。大学構想には賛成するものの、それは長年支部の団結のあかしであるカイロ教室閉鎖と支部の収入源を失うことを意味していたからである。人は新しいものより、失うものにより抵抗を示すものだ。

実務に携わるであろう人たちも、経験のない、しかも膨大な仕事を考えると頭をかかえた。第1に、豪州本校に契約金、開校準備金、施設の保証金や家賃を支払っても一番重要な学生確保の自信が全くないのだ。

そして一度決断すれば、ストップはきかない。支部どころか本体の存亡がかかっていた。さらに当時明かされてなかったが竹谷内一恵氏の病状が重く、日本校の責任を負う他の執行部も少なくとも開校を遅らせたかった。9月の理事会の役員は心はゆれにゆれた。

しかし決断は「開校」だった。

このプロジェクトはJCAの夢の実現であり、絶対成功させなければならない。そこで会長の竹谷内宏明氏が校長、理事長の村上佳弘氏が教務主任という基本ラインが確認された。

村上氏はその時の心境を述べる。

「JCAの底力を見る思いでした。役員と会員が一致団結して取り組んだわけですから。また国際的に抜群の実績と人脈をもつ竹谷内一恵氏の役割は大きいものでした。健康面で不安を抱えながら、全身全霊を傾ける同氏の姿を見るにつけ、このプロジェクトの成功を

確信するようになりました」

天が我らに味方

それから計画は驚くほどのスピードで進展を見せる。SDビルの6Fが偶然12月に空くことになり、現4Fは事務室兼図書室、6Fは1年生の教室に決まった。とにかく2フロア約70坪が確保できた。

豪州RMITとの文通は急増した。カイロ関係で翻訳された著書リストが送られ、教材作成の検討に入った。日本校の講師予定者リストが送られ、履歴書を英文にして講師資格の審査が行なわれた。豪州での実習計画や日本の大学との協力関係も調査に入った。実際に幾つかの大学関係者と会い、協力関係の相談を行なった。カイロ学の講師を集めるのは簡単ではなかった。DCの資格をもち、オーソドックスな考えをもち、新橋に勤務できる人を探すのは容易でなかった。外部講師を探すのに多大な貢献をしたのが吉橋昌厚氏であった。彼の大学時代の多くの友人が、東邦大学医学部、理学部の教員におり、彼の人脈で多くの有能な講師を確保できた。

クレイハンス教授からさらに朗報が入った。理事会がディプロマ上のディグリー（学位）授与を認めたというのだ。豪州本校と同じ大卒の資格が与えられ、3年制で1つ、5年制卒だと2つの学位、ダブル・バチエラズでDCと同格になるというニュースは我々の苦勞を吹き飛ばすのに十分だった。

11月に大学案内のカatalogが完成、本格的な募集が始まった。95年1月には鈴木淳氏を事務長として迎えた。

RMIT日本校は税法上、(有)ジェーシーエー企画によって運営され、その母体（出資者）は業界団体のJCAである。93年の有限会社設立を契機に、JCAは会費で賄う組織になり、営利事業はすべて有限会社が行なうことになった。従って、契約は豪州RMIT大学とJCAの間で調印し、運営は有限会社が行なう。大学が外国の1任意団体と契約するというのは異例なことで、JCAの信頼を示すものだった。

4月開校をめざして準備は進むものの豪州本校の都合で調印式が大幅に遅れ、契約なしの開校の不安が高まった。大きなコミットメントでは一つ歯車が狂うと、全体に影響する。未知なる体験は常に不安がつきまとった。教材や資料の到着遅れも不安を増した。「本当にできるのか」は常に私たちの頭から離れなかった。

大使館での調印式

調印式は95年3月16日、豪州大使館でカルバート駐日大使立ち合いのもと、RMIT大学ピーナランド学長とJCA竹谷内宏明会長の間で行なわ

れた。日本で本格的なカイロプラクティックの学位コースが認められた歴史的瞬間であった。

豪州大使館教育部もRMITの学位プログラムに強い関心を示していた。豪州政府としてアジアに教育展開するのは、方針であったからだ。

振り返るとJCAは恵まれていた。自前で学校を始める受け皿があったこと、バブル時代から大学設立資金を貯めていたこと、JCAカイロ学院の経験を生かしたことで、94年当時は円高で有利だったこと、同じく不況で家賃を低く借りられたこと、翻訳テキスト・シリーズの第1号、「カイロ総覧」が完成したこと、なかでも最大にラッキーだったのは最初に39名の学生を確保できたことだった。

「海外とはいえ公的な、しかも世界に通用する学位が与えられ、大学の名称を堂々と使えるのは最大の喜びで感無量です」

当初から運営に携わってきた竹谷内伸佳氏は述懐する。

開校式にWFC幹部

RMIT大学日本校の開校式／1期生入学式は95年4月16日、医学界の重鎮、鳥山、佐藤両教授、WFCのスエニー副会長、クレイハンス教授らを招いて新橋の日赤会館で盛大に行なわれた。おりしもカイロプラクティック誕生百周年の年だった。

WFCの副会長が参列したのは、RMIT大学日本校が単なるJCAの事業でないことを示していた。それは世界人口の半分以上を擁するアジアで初めて世界基準のカイロプラクティック教育を始める、言い換えれば、カイロが真にグローバルになる記念すべき日であった。

WFCのスエニー副会長は国際的に認められる大学教育を祝して次のように挨拶した。

「優れた教育環境をもつことは業界の発展に不可欠です。業界の質を高め、研究を重視し、そのような中でのみカイロはヘルスケアとして正当に位置づけられるのです」

開校式を見守る1枚の写真があった。それはナショナル・カイロ大学J・ジェンシー学長の遺影だった。

「素晴らしいみなさまの日本に、みなさまの手でカイロプラクティックの大学が作られることを信じています…」

「私たちは夢と希望をもってさらに進もう。人間で最も素晴らしいことは、困難に打ち勝って、夢が真実であったことを最後に言える人である」

この言葉にどれだけ励まされたことだろう。ジェンシー先生に関係者たちは思わず叫んだ。

「先生！ついにやってみました」

RMIT大学日本校は、こうして多くの善意と幸運に恵まれてスタートしたのだった。(完)